#### 日本英語検定協会 [グローバルキャリアのための留学情報紙]



# The University Times

February 2015 Vol. 38

http://jtimes.jp/utimes
produced by IELTS by Eiken × The Japan Times othe Japan Times, Ltd. 2015

CONTENTS

■ Global Leader's Voice	■ Journalist's Eye	■ Key to Success	■ IELTS World IELTSテストのコツ —13
佐藤 勲さん	日本人は「おもてなし」が得意?	留学トラブル解決策 /	
(東京工業大学グローバルリーダー教育院教育院長)	異物混入事件で大切な危機管理	Book Review	
■ Studying Abroad in the U.S.A	News in English	Scholarship List	■ IELTS World IELTS 対策コースナビ/攻略本
私の米国留学	英文記事を読んでみよう	奨学金情報	
■ University's Challenge	■ Visit a Global Company	IELTS World IELTS Hot News	■ Study Abroad Benefits
芝浦工業大学	富士フイルム株式会社 8 9		留学で培う3つの力

#### Global Leader's Voice

#### グローバルリーダーインタビュー

## 「専門の殻」を破って 幅広い知見を獲得しよう

Vol. 8 佐藤 勲さん 東京工業大学グローバルリーダー教育院 教育院長

平成23年、東京工業大学は「グローバルリーダー教育院」を 設置し、翌年からは文部科学省の「博士課程教育リーディング プログラム」に採択された。真のグローバルリーダーの養成を 掲げる新しい大学院の創設者、佐藤勲教育院長に そのユニークな取り組みと、これからの展望について伺った。

#### 分野にとらわれない 俯瞰的な視点と能力を

「グローバルリーダー教育院 - Academy for Global Leadership (以下 AGL) はそもそも、『自分の専門にとらわれず、物事を広く見ることができる』、『幅広い知見を生かして世界を牽引できる』学生を育てる目的で創設しました」と佐藤教育院長は切り出した。

「東京工業大学は理工系に強みを持つ大学ですから、多くの学生は『専門分野の学術を深め、細かい点を突き詰めていく』、すなわち"深掘り"の作業を非常に得意としています。これは学術の進展、スキルの向上という側面においては非常に有効と言えます」。しかし、と佐藤教育院長は続ける。

「現代社会の抱える問題や課題は、一つの学術分野の知識だけでは解決できないものがほとんどです。つまり、将来社会の課題を解決できる人材となるためには、個々の専門分野を突き詰めるだけでは不十分なのです。つまり、自分の専門分野は"背骨"としてしっかりと持っているが、それに加えて他の学術もつなげて広く見ることができる、そして実際に広い知見を生かし、世の中に波及効果・

成果を生み出せるようになることが、AGL の学生の目指す到達点となります」

これを踏まえ、AGLはさまざまな専門分野を横断的、俯瞰的に見ることができる学生の養成を理念としている。現在は一橋大学との連携により運営されており、科学技術分野に強みを持つ東京工業大学と、人文社会分野にアドバンテージのある一橋大学が共同で、学生にプログラムを提供している。

#### 鍛錬と研鑽を積む 道場プログラム

「AGL に籍を置く学生はまず"道場"に所属し、他学生とともに研鑽を積んでいきます。現在4つある道場はそれぞれの道場主(=専任の教員)の企画によってカラーが異なり、学生は2クール、すなわち2つの道場をクリアすることが求められます」

このユニークな"道場プログラム"は、大きく3つの段階から構成される。

まず選抜をくぐり抜けた学生が、『社会で 今、どのようなことが課題になっているのか』 というテーマで外部の講師からレクチャーを 受ける(導入)。その内容を踏まえて学生同 士でディスカッションを行い、『自分たちに何



ができるのか』を議論していく(グループワーク)。さらに社会の課題やソリューションについての知見を深めた後、実際に現場に出て成果の実践に取り組む(修了プロジェクト)。

「道場では、さまざまな専門分野の学生が 集まり、議論を重ねていきます。実は理工学 系の学生は普段、同じフィールドに属する学 生とともに研究室で過ごすことが大半ですか ら、多くがダイバーシティには不慣れです。 そんな学生が歴史学や地球生命学など、自分 の専門外の分野の学生と『社会の課題に対し て、自分たちは何ができるのか?』という議 論を突き詰めていく。この作業には、とても 意義があります」

道場の大きな特徴と言えるのが、徹底した 学生主体の方針だ。グループワークの段階か ら、学生は自ら学びの場を求めて学外にまで 飛び出していく。大学側は、その活動を経済 面などで後押しする、という立ち位置である。 学生の発案で海外の大学、研究機関との連携 を行った実績も多い。これまでにインドネシ ア、モロッコ、中国、アメリカなど、各国に 活動の場を広げてきた。

2014年8月にインドで実施したグループワークでは、道場主は『インドに行って、自分たちが行える活動を考える』というテーマを学生に投げたのみで、後はすべて学生がゼロからプログラムを構成。実際に現地ではインド系・日系企業などを多数訪問し、さらにインドの大学生と『インドでの新興事業・ビジネスの可能性について』というテーマでディスカッションを展開するなど、濃密な内容を練り上げた。

「学生はこれらの研修を通して、新興国の持つ雰囲気や現地の人々の価値観・考え方を実際に肌で感じ、理解することになります。また、プロジェクトに参加をした日本人学生の間で強い連帯感が形成される。これらの人脈が、将来学生が広いフィールドで活躍する際の武器になれば良いと期待しています」と佐藤教育院長は語る。

#### オフキャンパス教育で 世界を舞台に腕試し

実社会の多様な課題、その解決方法について見識を深め、道場プログラムで研鑽を積んだ学生は、AGLのもう一つのステップである半年の学外活動に臨む。この"オフキャンパス教育"の内容も、全て学生主体で進められていくのが基本だ。

「各学生の派遣先は、その学生の将来の希望などを聞いて、キャリアパスに沿った受け入れ機関を相談しながら決めていきます。 AGL専属のオフキャンパス教育コーディネーターが派遣先を紹介することもありますが、学生自身が強い希望をもって、企業や研究機関と自ら交渉をしてくる場合もあります」

学生の派遣先は実にさまざま。国内の企業に長期インターンシップのような形で所属する学生や、他大学の研究機関の一員となる学生もいる。約4割の学生は、海外へと飛び出す。なかには、アメリカのベンチャーファンドへの派遣を希望する例もある。学生はどのような企業・研究機関に入った場合でも、実際のプロジェクトや研究活動に参加し、結果・結論を出してくることが必須課題だ。

「ドイツのベルリン自由大学で『ドイツと 日本の環境政策決定方法の違い』について学 びに行った学生もいます。実際に現地に行く と、日本からは見えにくいドイツの環境政策 の実情や問題点なども分かり、非常におもし るいようですよ」

ちなみに派遣先に海外を選択した場合、現 地で必要になる語学力のスキルアップも、学 生本人の責任で行わなければならない。

「AGLには"世界で活躍できる人材の育成" という目的がありますが、そのために必要と なる語学は単なる"ツール"です。非正課科 目で若干の語学クラスは開講していますが、 基本的に『語学スキル、コミュニケーション スキルは自分で磨け』というスタンスですね」

学生は、派遣に向けた語学力の向上、派遣 先での研修計画や滞在先の確保など、オフ キャンパス教育に必要な準備をすべて自己責 任で行うことになる。



自ら学び取るものです。リーダーに必要な品格と信頼は

「今の学生の特性かもしれませんが、専門分野の読み書きはできても、コミュニケーションとなるとなかなか自信を持って踏み出せない傾向があるように思います。AGLの学生は、実際に現地で場数や経験を積むことで、学力・コミュニケーションカ両方の語学スキルを身につけていきます」

#### 国際会議で磨いた コミュニケーションカ

意外にも、自身は長期の海外留学経験はないという佐藤教育院長。実際に国際的知見や 英語力は、多数の国際会議で実地経験を積む ことで養っていった。

「機会を捕まえては、指導教員について海 外に行っていました。一番初めの国際会議は デンバー。初の海外でもありましたから、右 も左も分からずに『話せば分かる』『何とか なる』という体当たりのコミュニケーション 方法でしたね。その会議の帰り際、指導教員 が気を遣ったのか『サンフランシスコでも 寄って見聞を広めてこい』と、私は一人、デ ンバーの空港で放り出されました(笑)。サ ンフランシスコでは自分で安いホテルを探し て、町中をひたすら歩き回って……。結果的 に、とても良い経験だったと思います。私も 理工分野の出身者だからか、実は語学には苦 手意識がありました。今でも得意とは言えま せん(笑)。それでも場数を踏むうちに、コミュ ニケーション力は自然に身についていきまし たね。今でこそ時間がとれなくなりましたが、 少し前までは、国際会議には年間4~5回 参加していました」

### これからのリーダーに欠かせない要素とは?

AGLでは2014年3月、「グローバル・イノベーションリーダー人材の養成を目指して」と銘打ったシンポジウムを行った。開催の背景には、「AGLの目指す"グローバルリーダー"について、一度はっきりと定義する」という意図があったという。

「今回のシンポジウムの基調講演では 『リーダーシップは教えられるのか? (Can Leadership Be Taught?)』をテーマとし て取り上げました。結論としては、リーダー シップの素養は教えられるのではなく学び取 るものだ、というところに帰結しました」

佐藤教育院長は、"リーダー"に求められる素養として、まず"品格·信頼"を挙げる。

「この『品格を磨く、他人の信頼を得る』というスキルは、誰かに教えられて身につくものではないと考えています。AGLでもそうですが、初めは集団の中で独りで仕切りたがる学生がいても、徐々に『それでは信頼を得られない』ということに気づき、周囲の意見も立てるという"駆け引き"の能力を身につけていく。『どうすれば周囲がついて来てくれるのか』を考えるようになる。この信頼や、周りを惹きつける品格が、まずリーダーに必要な第一の要素ではないでしょうか」

そして佐藤教育院長がもう一つ「リーダー には不可欠」と語るのが、"明確なビジョン"だ。

「理工系の人間の特質と言えますが、目の前に立つ障害を順番に乗り越え、克服していく地道な作業は得意なんです。しかし、いきなり遠い中空を指して『あそこを目指したい』と思い描くことは不慣れで、不得意な傾向があります(笑)。しかしリーダーには、柔軟な思考で明確なビジョンを描き、グループをその方向に導いていく能力が不可欠です。AGLの学生には道場やオフキャンパス教育を通して、『具体的なビジョンを提示できる能力』も磨いてもらいたいと思っています」

#### 目指すは究極の教養教育 これからの AGL

現在4年目を迎え、一橋大学の学生と合わせて約60人が在籍するAGL。今年度末には、初めての修了生が輩出される予定だ。それぞれの卒業後のビジョンは実に多種多様である。

「『最先端研究の場で、自分の力を試したい』という学生もいれば、『自分で会社を起こしたい』という学生もいます。学生の専門は理工学の分野が多いですが、キャリアプランはその枠にとらわれず、非常に幅広い範囲にわたっています」

また、共同でグループワークやプロジェクトを成し遂げた学生同士の結束は、非常に固い。将来はお互いに AGL 時代の人脈を生か

して活躍の場を広げてほしい、と佐藤教育院 長は語る。

今後は AGL のプログラム自体も、さらに 発展させていくという。

「AGLの目的は、言い方を変えると、"究極の教養教育の提供"になるのではないかと考えています。ですから将来的には、AGLのプログラム内容を東京工業大学の教養教育の一環として組み込んでいければと思います」

東京工業大学の掲げる「教養教育と専門教育を有機的に関連させる楔形教育」(学部 4年生まで教養教育科目を継続させる、教養重視の方針) も、この佐藤教育院長の展望と一致する。

「教養、すなわちリベラルアーツの重要性は、大学教育の場でもっときちんと認識されるべきだと考えています。東京工業大学でもこれまで学部までだった教養教育を大学院まで延長しよう、という計画が具体化されようとしています。

ちなみに本来の"リベラルアーツ(= 自由になるための技)"は、奴隷制が存在していた当時の『拘束される奴隷の状態から自由にあるための技術』が発端と言われています。現代に置き換えて言うと、『学生が"専門"という頸木から自由になるための学問』ということになるでしょうか。つまり、大学院、特に博士課程の高度な専門分野を学ぶ学生ほど、より高いレベルのリベラルアーツ(= 高度教養教育)が必要になると言えるのです。AGLでは今後も、専門分野にとらわれない能力養成を行っていきます。

そして、将来的な希望となりますが、もっと大学間連携の枠を広げたいと考えています。例えば他大学で行っているリーディング大学院プログラムと連携して、『専門分野は所属大学で勉強し、高度教養教育や新しいプログラムを共同でやりましょう』といった提案をしていきたい。そのような、大学の枠を超えた連携の輪を広げられれば、理想的ですね」

昨今、盛んに取り沙汰されている"リベラルアーツ重視"の流れを牽引する大学院として、AGL は今後も進化を続けていく。

最後に、将来のグローバルリーダーたちに 向けて、エールの言葉をいただいた。

「自分の好きなことや専門分野を突き詰めることは、第一のステップとして非常に大切だと言えるでしょう。しかし同時に、周りの人々とのインタラクションやコネクションを意識してつくっていくということも、とても重要です。大学生や大学院生は、どうしても自分の専門やテリトリーが固定されてしまう分、視野も狭くなってしまいがちです。その殻を破れる、意識や気概といったものを常に持ち続けてほしいと思います」

AGL にかける静かな熱意を、終始真摯に語って下さった佐藤教育院長。写真撮影にあたって凛と背を伸ばし、カメラに向かうその姿に、"品格あるリーダー"のあるべき姿を見た。(英検グローバルリーダー研究グループ

西畑瑠衣子)

#### 佐藤 勲 (さとう いさお)

1958年東京都出身。81年東京工業大学 工学部卒。83年東京工業大学大学院理工 学研究科修士課程修了。84年同研究科博 士課程退学。同年から東京工業大学助手、 助教授を経て、2000年から教授。専門 は熱工学。2011年にグローバルリーダー 教育院長に就任。